

## 奄美群島の産育をめぐる慣習の伝承と変容に関する研究(第二報)

—徳之島での調査より—

Study on Transition of Customs Related to Pregnancy, Child Birth and Care  
in Amami Islands (Part 2)

—Survey in Tokunoshima—

鹿児島女子短期大学 宇都弘美  
鹿児島大学医学部保健学科 下敷領須美子

### 1. 緒言

奄美群島は亜熱帯性・海洋性の温暖で豊かな自然環境に恵まれ、島唄や独自の食習慣など独自の文化を現在に受け継いでいる。鹿児島県あまみ長寿・子宝調査の報告書(平成16年10月)<sup>1)</sup>によると、人口10万当たりの100歳以上長寿者の比率は奄美64.86人、全国平均18.05人ときわめて高い。さらに、平成10~14年の合計特殊出生率市町村ランキングにおいて、2位に徳之島の天城町が入り、10位までに4町村が入るといふ子宝の地域である。少子高齢化の急激な変化に多くの社会的課題を突きつけられる現代社会であるが、今に“子宝”を受け継ぐ奄美群島の産育に注目し、今回は、徳之島を調査対象に選んだ。

徳之島は奄美大島の南西に位置し、鹿児島までの航路距離は492km、周囲89.1km、面積247.6km<sup>2</sup>、人口28,108人で、徳之島町、天城町、伊仙町の3町で形成されている。耕地面積は群島内最大で、さとうきびを主体に野菜、畜産(肉用牛)との複合経営の農業が営まれ、住民のほとんどが農業に従事している。<sup>2)</sup>(図1)

今回、徳之島で調査した結婚・妊娠・出産・子育てに関する聞き取りの時代的背景は、昭和20~30年代である。当時の奄美群島・徳之島の状況を記す資料から、生活背景をうかがうことができる。昭和28年版『奄美大島の現況』<sup>3)</sup>によると、戦前から、食糧、日用雑貨、農機具その他生活必需品の大半は鹿児島県からの移入によってまかなわれていた。戦災によって基本産業の生産手段を失い、更に昭和21年2月以降は連合軍司令官の命令により日本政府の補助援護が断たれると同時に、生産品の市場を失った結果、奄美群島の経済的条件は完全に壊滅し、住民生活は年と共に窮迫の度を加えた。その間米国政府の復興予算による補助(ガリオア資金)があったが、これは戦災の痛手を被った経済再建には十分ではなかった。住民の中には、甘藷や蘇鉄だけで露命をつないでいるものも漸増していた。そのため生活苦から来る窃盗犯を主とする犯罪件数、失業者、転落要救護者は増大し、内地引揚、沖縄転出等が増加し昭和27年から1ヵ年の間に約1万人の人口が減少している。37,000人に上る転落農家と、4,600人に上る潜在失業者(家族を含めると約19,000人)の処置は大きな社会問題となっていた。昭和27年度の統計によると、奄美島内小中学校児童総数約44,400名中、極貧困児童4,600余名、長期欠席児1,884名、病弱児692名、肢体不自由児297名、知的障害児651名、精神障害児46名、アルバイト児童約1,700名、不就学児751名、

要教護児265名、孤児757名に上り、青少年の犯罪も戦後年々増加し、昭和21年の検挙人員87名に比し、昭和27年254名と約3倍に増加している。その他、6,740名に上る戦没者、10,000名に近い遺族数、毎年の台風による災害等により、生活はいよいよ急迫している状況であった。また、『奄美群島における水道水源調査報告』（昭和31年）<sup>4)</sup>には、当時の徳之島の中心地であった亀津町は、「井戸は海潮の影響をうけ塩分を多量に含有し、又市内を貫流する大瀬川、川口の汚染された河水をそのまま利用するか、付近の山林の湧水を竹樋にて導水している。」天城村は、「少量の湧水を、又田畑の間を流れる汚染された小川の流水等を肩運搬等によって遠くこれを求め、連日連夜多大の労力と時間を費消し、・・・」とあり、生活環境の厳しさがうかがえる。また、『へき地医療対策について』（昭和36年）<sup>5)</sup>によると、昭和33年の鹿児島県民一人当たり所得水準は全国100として62と全国最下位で、昭和29年から33年度までの5年間についても61%前後である。しかも、昭和34年の大島郡民一人当たり所得は、鹿児島県民所得のさらに78.2%という低さであり、経済的状況の厳しさがうかがえる。医療環境については、『昭和30年度版 奄美大島の概況』<sup>6)</sup>によると、昭和29年当時、徳之島には医師10名、助産所は23箇所となっている。

このような時代背景を念頭に置きながら、昭和20～30年代の出産や産育慣習が現代にどのように受け継がれ、地域における子産み・子育てに関する意識や行動に継承されているのかを分析したい。

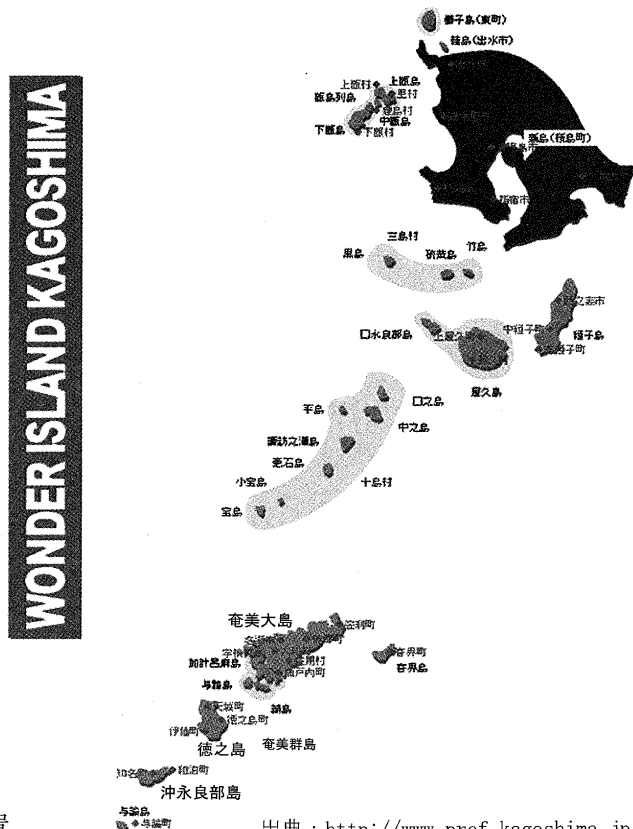


図1 徳之島の位置

出典: <http://www.pref.kagoshima.jp/home/rishinka/kagoshima.html>

## 2. 研究対象・方法

徳之島に居住し、現在70歳以上で、調査に協力の得られた、子どもを産み育てた経験のある女性17名に対して、小集団での半構成式の聴き取り調査を実施した。個人面接ではなく、小集団面接にした理由は、高齢者であるため、時代・文化的な背景に関しては、複数の意見を聞くことにより整合性が高まると考えた。調査期間は平成18年2月15日から17日である。

調査内容は、対象者自身の結婚の経緯、妊娠・出産時の習俗や受けた支援、子育て時の状況や受けた支援、および現代の子育てに関して思うこと等である。

## 3. 結果

### 1) 対象の背景

対象の年齢は、76歳から90歳で、平均81.5歳である。17人中11人が徳之島以外での生活経験があった。子どもの数は、2人から8人で、平均5.1人であった。

表.1 対象の背景

名 前	年 齢(歳)	島外での生活の経験	子どもの数(人)
A	79	有り(神戸)	6
B	84	有り(朝鮮)	5
C	83	有り(神戸、満州)	4
D	78	有り(名古屋)	6
E	78		5
F	76	有り(鹿児島県・名瀬)	5
G	85	有り(大阪)	6
H	81	有り(長崎)	6
I	90		4
J	89		7
K	81	有り(鹿児島県・知覧)	3
L	79	有り(神戸)	2
M	78		8
N	81		6
O	80	有り(神戸)	6
P	80		4
Q	84	有り(神戸)	4

2) 結婚の経緯や妊娠・出産・子育て時の習俗や受けた支援、および現代の子育てについて思うこと

① A氏

結婚の経緯は、終戦後に親や周囲の人のすすめによる見合い結婚であった。出産は、全て自宅で産婆に取り上げてもらった。夫が手を握って力づけてくれた。産後も2週間位は、産婆に来てもらい処置を受けた。産後は風呂に入らないといわれ、2週間位入らなかったし、最初に入った風呂では、頭(髪)を洗ってはいけないといわれた。生まれて7日目には名前をつけ、膳をそろえて親を呼んで、(名付け)祝いをした。

今の人たちは、子どもを産まなくなった。自分たちの時代は、産み育てることも働くことも当たり前だった。

② B氏

結婚の経緯は、親のすすめによるものであった。出産は、1人目は朝鮮からの里帰り出産で実母に手伝ってもらい産み、2人目、3人目は朝鮮で一人での出産だった。終戦後、徳之島に引き上げてきて、4人目からは徳之島の自宅で姑や女きょうだいの助けを借りて出産した。さらしの腹帯はあったが、巻かなかった。お産は生活の一部で、妊娠したからといって特別なことは何もなく、生活のために働くのが当たり前だった。夫は何もせず、「産まれたか」というくらいだった。全員母乳で育て、1歳の誕生日くらいまで母乳をあげた。

孫たちも、時々遊びには来るが、来て帰るだけで、一緒に食べたり寝たりの生活を共にしないので情が薄いように思う。

③ C氏

結婚の経緯は、親のすすめによるものであった。出産は、満州で定期的に産婆に診てもらい1人目、2人目を出産した。さらしの服帯も巻いた。終戦後、徳之島に引き上げてきて、3人目からは全員、近くの産婆に取り上げてもらった。妊娠や出産だからといって特別なことはなく、いつものように働いた。生まれそうになったら産婆を呼び、妊娠中に産婆にかかることはあまりなかった。後産(胎盤)は、家の裏に小さな穴を掘って埋めた。産後は、風呂には2週間位入らなかったが、身体は拭いてきれいにしていった。仕事は、産後1ヶ月位は休めた。その間は、実家の母親、姑、近くの女きょうだいが大事にしてくれ、産後の1週間くらいは日頃食べられない米の硬い粥(どろどろしてない硬い粥)を食べられた。家に飼っている鶏を殺して、丸ごと煮て、だしを取り食べた。産後の血を作るとか、血をきれいにするといいといわれて、紫色の葉野菜の「ハンダマ」を食べるといいといわれていた。また、蛸の墨がいいといわれて、米と一緒に炊いて黒いご飯を食べた。親の家で出産の祝をした。初めて赤ちゃんを外につれて出るときは、「ケム」(妖怪)がついたらいけないと言って、さらしを切って硬くよって紐のようにし、にんに

くを手を持ってそのさらしの紐を持ち、さらしの紐の先に火をつけて魔よけのようにして歩いた。子育てについては、夫は何も手伝ってくれなかったが、そんなものだった。女同士で助け合った。

④ D氏

結婚の経緯は、親のすすめによるものであった。出産は、5人目までは全て自宅の夫婦の寝室で、産婆に取り上げてもらったが、6人目は2ヶ月早く生まれ、産婆が間に合わず一人で産んだ。産後も1週間は産婆が通ってきて、処置をしてくれた。産後1週間目に名付け祝いをした。産後も特別食はなく、サツマイモを食べて（お腹をある程度満たして）から米を食べていた。全員、母乳で育てた。母乳が良く出るといって、大豆の呉汁（すりつぶした汁）やソーメンを味噌汁に入れて食べた。

⑤ E氏

結婚の経緯は、親のすすめによるものであった。出産は、1人目は島内の実家へ里帰りして、産婆に取り上げてもらったが、1週間後には自宅へ帰った。2人目からは全て、自宅で産婆に取り上げてもらった。出産前に産婆に診てもらうことはほとんどなく、出産の時に産婆を呼んだ。昭和23年頃、産婆に出産介助と産後1週間通ってもらって100円だった。出産祝いに5円くらい包んでいた時代の話だ。妊婦だからといって仕事を減らしてもらえることはなく、自分もその時はそういうものだと思っていた。その頃、お乳の出ない人は、重湯の上澄みを飲ませたり、もらい乳をしていた。

⑥ F氏

結婚の経緯は、親や周囲の人のすすめによるものであった。出産は、2人目は島内の実家へ里帰りし、産婆に取り上げてもらったが、それ以外は全て自宅で産婆に取り上げてもらった。出産前に産婆に診てもらうことはほとんどなく、出産の時に産婆を呼んだ。出産のための水汲みにも自分で行って、準備をした。妊娠・出産・子育ての話は、恥ずかしいから自分達も誰にも、親にさえも聞かず、親も教えない。親の出産を見たりして知る。母乳は4人目までは良く出たが、5番目は姑の病気の世話をしたりして、（忙しかったためか）出なくなり、ミルクを飲ませた。子どもは、舅や姑が育ててくれて、自分は畑仕事をした。なまけものと言われるので、男親が子どもを抱いて外に出たりすることはなかった。言い伝えとしては、妊娠中は弔いに行ってもよいが、亡くなった人と対面してはいけないとか、亡くなった人が自分と干支が同じであったら、弔いにも行ってはいけないと言っていた。

今の子育ては、手伝いもないし、費用もかかって大変だと思う。昔の子どもは、よく親を手伝った。

⑦ G氏

結婚の経緯は、夫にみそめられたものであった。出産は、全て自宅の夫婦の寝室で、姑が手伝ってくれて、座って産んだ。臍の処置も姑がした。産湯は使わず、お湯で児の体を拭いた。出産後の食事は、白米を食べたり、鶏をつぶして食べた。りしたが、普段はさつま芋が常食だった。お産後の家事は、洗濯などは実母が来てしてくれたため、1週間くらいは寝て過ごした。全員、母乳で育てた。農作業がある時は、上の兄弟が子どもをみてくれた。

今の若い人の子育てについては、母親の愛情があるのかなあと思う。

⑧ H氏

結婚の経緯は、周りのすすめで、従兄弟と結婚した。結婚後も実母と同居した。妊娠中は、1ヶ月に1回程度、産婆に診てもらった。出産は、1人目は予定していた産婆が不在で、実母が介助した。その後、産婆の助手が後から来て、臍の処置と産湯にいった。2人目からは、全て親戚の産婆が、自宅の夫婦の寝室で取り上げてくれた。夫は、出産後も同じ部屋で寝ていた。産後1週間くらいは、産婆が沐浴に来た。白米は出産後や正月・お祭りの時に食べ、普段はさつま芋・そら豆・つわなどを食べた。陣痛が始まったら、元気をつけさせるために鶏スープを飲ませてもらった。熱いものが薬と言われていた。また、産後は鶏をつぶして食べさせてもらった。魚の汁を飲むと母乳が出ると言われた。言い伝えとしては、難産の時には、みそがめの蓋を開けたり、線香を立てたりする。けものしか双子は産まないと、双子は嫌われた。

⑨ I氏

結婚の経緯は、親戚や親のすすめによるものであった。出産は、全て陣痛が始まった時、近くの「取り上げばあさん」を呼んで、自宅の夫婦の寝室で取り上げてもらった。どんな風に産んだかは、よく覚えていないが、安産だった。妊娠中に特別に何かをしたという覚えはない。腹帯もしなかった。産婆にかかるともなかった。お産後は、鶏を殺して食べた。名付け祝いは、親戚を呼んで膳を囲んで祝った。産後1週間位は、床を取って休んでいた。母乳は良く出て、全員母乳で育てた。子育ては姑がし、自分は畑に仕事に行って母乳だけ飲ませた。

今の若い人の子育てについては、贅沢だと思う。

⑩ J氏

結婚の経緯は、親のすすめで、従兄弟と結婚した。妊娠中に特別に何かをしたという覚えはない。腹帯もしなかったし、産婆にかかるともなく、産む日まで働いた。出産は、近所の「取り上げばあさん」が、取り上げてくれた。後産は、畑に穴を掘って埋めた。妊婦がお米をつくると安産になると言われていた。

⑪ K氏

結婚の経緯は、親のすすめによるものであった。妊娠中に特に気をつけたこと

は覚えていない。安産祈願に近くの権現さまのお社に1人でお参りに行った。島外に住んでいた実母が、さらしを送ってくれ、近所の人に教えてもらって腹帯を巻いた。出産は全て、陣痛が始まってから、近所の経験のある「取り上げばあさん」を呼んで、取り上げてもらった。出産場所は、自宅の夫婦の寝室であった。出産の時は、夫が後ろから抱えるようにして胸の下に手を回し支えてくれた。出産後は、鶏を殺して食べた。母乳が良く出るためには、「トーシブニ」といって、豚の尻の骨や肉でスープをとって雑炊を作って食べた。団子汁、餅、小豆がいいとも言った。普段は食べられないものを食べさせてもらい、大事にされた。母乳は良く出て、全員母乳で育てた。生後7日目頃に名付け祝をした。宮参りはなかった。「ハマウリ」といって、その年に生まれた子どもを浜に連れて行き、親戚が集まって、新しい赤ちゃんを祝う「ミイババ」という祝いがあり、ご馳走を食べた。子育てで辛かったことは、水が近くになかったため、洗濯が大変だったことである。

今の若い人たちの子育てのことは、娘たちも遠く（島外）にいるので、よく知らない。

⑫ L氏

結婚の経緯は、親のすすめで、従兄弟と結婚した。出産は、1人目は「取り上げばあさん」を呼んで、取り上げてもらった。2人目は、親戚の産婆に取り上げてもらった。座って産んだような気がする。働くことでお産が軽くすむと言われていたので、産む前まで働いた。産後は、実母が手伝ってくれた。

今の若い人の子育てについては、うらやましいと思う。

⑬ M氏

結婚の経緯は、親のすすめによるものであった。出産は全て、「取りあげばあさん」による出産で、しゃがんだ感じで、座って産んだ。出産場所は、全て夫婦の寝室であったが、出産後は、夫はしばらく別室で寝ていた。胎盤は、夫が自宅の雨のかからない所に埋め、目印をつけておいた。出産後は、1人目の時は1ヶ月ほど寝ておれたが、2人目からは寝ていられるのは1週間ほどであった。言い伝えとしては、肉を入れたりした熱い（暖かい）ものを食べると良いとか、朝ごはんを食べる頃に産むと縁起がいいなどと言われていた。また、妊婦は吊いのある時には中に入らない、干支が一緒である場合は吊いに行ってもいけない、妊娠中に障害者を見て笑ったりすると、障害児が生まれるなどとも言われていた。沐浴は実母や姑がしてくれた。タライではなくバケツにお湯を張り、足を入れて底上げして入れていた。母乳をあげるため、子どもも畑に連れて行っていた。

⑭ N氏

結婚の経緯は、親のすすめによるものであった。出産は、全て産婆に自宅の奥の間で取り上げてもらったが、いつも同じ産婆というわけではなかった。だから、寝て背中を丸くして産むこともあったし、1回くらいは上から紐を引いて産むこ

ともあった。出産後は、1人目の時は1ヶ月ほどゆっくり休めたが、2人目からは、ゆっくり休めるのは7日間ほどであった。温かいものを食べると母乳が出ると言われていた。洗濯や子守り、食事のしたくなどは姑が手伝ってくれた。

今の若い人の子育てについては、うらやましいと思う。

⑮ O氏

結婚の経緯は、親戚のすすめによるものであった。出産は全て、「取り上げばあさん」に取り上げてもらい、産後1週間くらいは沐浴にも来てもらった。出産場所は、夫婦の寝室で、夫はその場になかった。「取り上げばあさん」へのお礼は、手伝いで返していた。産後1ヶ月は、外の仕事をしなかった。弔いがあったら、妊婦だけでなく、夫や家族も納棺時に亡くなった方を見てはいけないと言われていた。また、のぼせ気味の人は鶏の汁を食べてはいけない、魚の汁がいいと言われてもいた。「ハンシニラ」という、サツマイモをふかしてつぶし、割ってかためたものを食べていた。

今の若い人の子育てについては、仕事をしながら子育てをしているため偉いと思う。

⑯ P氏

結婚の経緯は、親のすすめによるものであった。出産は、1人目と2人目は家の棧に紐をかけて、それを引いて1人で座って産んだ。3人目からは産婆による出産で、母と姉が付き添い、さすったりしてくれた。出産場所は、夫婦の寝室であった。陣痛が来るまでは働き、陣痛が来てから産婆を呼んだ。4人目出産後、産婆から受胎調節の指導を受けた。普段はサツマイモを食べてお腹をある程度満たして、後からお粥を食べていた。お産後は、「クワモチ粥」という固めの粥を日に7回ほど食べた。お産後は、鶏は悪いものを出すとされていて、殺して食べた。産後1週間くらいは、(褥婦を)1人にさせず、外の仕事も1ヶ月くらいはしなくてよかった。安産祈願として、妊娠中に1回、妊婦本人か親が、米と酒を持ってえびす神宮に行ったりもした。妊娠中に火事を見たら児に赤あざが出るとか、妊娠中に懐に物を入れたら児に盗み癖がつくなどの言い伝えがあった。子どもを産み、外に出られるようになったら、「ガンミツリ」というお礼参りをして酒や米を供えた。名付け祝いは、生後1週間から1ヶ月の間に日取りをみて行った。最初の子(1人目)は、親戚なども呼んだ。

⑰ Q氏

出産は全て、「取り上げばあさん」に取り上げてもらい、出産場所は夫婦の寝室であった。生理が止まったら、大体いつ頃に生まれるかを自分で数えていた。出産後1週間後に床上げをする時に、お湯を沸かして体を拭いた。

今の若い人の子育てについては、恵まれていて、贅沢な子育てだと思う。



表2 出産の状況

名前	出産介助者	出産場所	胎盤の処理
A	産 婆		
B	第1子は実母が手伝い、後は一人で産んだ		
C	産 婆		
D	産 婆	夫婦の寝室	
E	産 婆		
F	産 婆		
G	姑が手伝い、座って産む	夫婦の寝室	
H	第2子まで実母、後は産婆	夫婦の寝室	
I	「取り上げばあさん」	夫婦の寝室	
J	「取り上げばあさん」		畑に穴を掘って埋める
K	「取り上げばあさん」	夫婦の寝室	
L	第1子は「取り上げばあさん」、第2子は産婆		
M	「取り上げばあさん」	夫婦の寝室	夫が、自宅の雨のかからない所に埋める
N	産 婆	自宅の奥の間	
O	「取り上げばあさん」	夫婦の寝室	
P	第1子と第2子は一人で産み、その後は産婆	夫婦の寝室	
Q	「取り上げばあさん」	夫婦の寝室	

#### 4. 考 察

徳之島での昭和20年から昭和30年代の産育や慣習については、妊娠中には安産祈願に行く者もあったが、ほとんどは、普段と変わりなく生活し、出産時に産婆や介助者を呼び、自宅で出産し、出産後は1週間から1ヶ月の間、普段の仕事から解放されて、体を休めることができ、育児に専念することができていた。また出産後は、普段の食事と異なり、栄養を取らせたり、乳の出を良くするために、米がたくさん入った粥や鶏をつぶし食べさせてもらったり、魚の汁を食べさせてもらおうといった、ご馳走があった。このような産後の食や体の養生は、私共の沖永良部島での調査<sup>7)</sup>の結果と同様であった。戦後の貧しい時代では、出産後は産婦が家族や周りの人から大事にされるひと時であったのだと考える。

今回の調査で特徴的だったこととして、有資格者の産婆の介助による出産ではなく、「取り上げばあさん」と呼ばれる、無資格だが出産の介助の経験が豊富な女性の介助を受けて出産した経験のある者が、17名中7名いたことと、実母や姑という同じく無資格の女性の助けを借りて出産した者が17名中3名いたことである。無資格者から出産の介助を受ける理由としては、住居の辺鄙さや経済的なことが考えられる。E

氏の語りにあるが、昭和23年頃、産婆が、出産介助と産後1週間の処置をすると100円というのに対して、取り上げばあさんの謝礼は、手伝いで返したり、農作物で返したりでよかった。徳之島保健所の『20年の歩み』（昭和54年）<sup>8)</sup>によると、昭和35年の出生児数は1,159名で、出産時の立会い（介助）者の内訳は、医師9名、助産師（産婆）724名、その他426名となっており、資料からも無資格者の介助も多かったことが分かる。

妊娠中の禁忌の言い伝えでは、妊娠中に火事を見たら児に赤あざが出る、妊娠中に懐に物を入れたら児に盗み癖がつく、妊婦は弔いのある時には中に入らない、干支が一緒である場合は弔いに行ってもいけない、弔いがあったら、妊婦だけでなく、夫や家族も納棺時に亡くなった方を見てはいけないというものがあつたが、昭和10年から13年に行った調査をまとめた『日本産育資料集成』<sup>9)</sup>の妊娠に関する俗信・禁忌・呪法の章にも、大島南部地方の言い伝えとして、同様あるいは似通った記述があり、戦前から戦後にかけては、このような言い伝えが伝承されていることが分かる。

C氏の語りに出てきた「ケム」は、田畑氏の奄美大島・大和村での調査<sup>10)</sup>にある「ケインムン」のことであろうと推察される。田畑氏によると、ケインムンは奄美の代表的妖怪で、鬼子母神の子供という。人間が自分に悪いことをすると、人間を病気にして、驚かすと言われている。

今回の調査で、複数の被験者が産み育てることを当たり前のことと捉えていた。近年、育児の孤立化が指摘され、子育てを楽しいと感じられない母親たちが増え、育児不安や子育て困難感への対策が注目されている。私共の先行研究<sup>11)</sup>で、奄美群島の母親たちは子育てを楽しいと感じて行えており、それは奄美群島の子育て地域特性であると述べたが、独自の文化や価値観が継承されやすい島という物理的条件の中、生活は厳しく苦しくとも、徳之島では「産育を自然なこと、当たり前のこと」という産育文化があり、現在にも受け継がれているのではないかと思われる。

## 5. 結 論

徳之島に居住し、70歳以上で、子どもを産み育てた経験のある女性に対して、本人の産育体験と慣習についての聞き取り調査を行い、以下のような結論を得た。①昭和20年から昭和30年代の出産は、自宅出産それも普段寝起きしている部屋での出産が多かった。②有資格者の産婆の介助による出産ではなく、実母や姑の他、「取り上げばあさん」と呼ばれる無資格者の介助による出産を経験している者が多くいた。③出産前は普段と同じように仕事をし、出産後は特別な食事を食べることができ、しばらくの間仕事を休むことができた。④産育を自然なこと、当たり前のことと捉えていた。

謝辞：稿を終えるにあたり、本研究にご協力を頂きました徳之島の住民の皆様ならびに保健センター・社会福祉協議会の職員の皆様に深謝いたします。

文 献

- 1) 鹿児島県大島支庁. 平成17年度 奄美群島の概況, 2006.
- 2) 鹿児島県. 鹿児島県あまみ長寿・子宝調査の概要報告書, 2005.
- 3) 鹿児島県広報渉外課. 奄美大島の現況, 1953.
- 4) 鹿児島県予防課. 奄美群島における水道水源調査報告, 1956.
- 5) 鹿児島県衛生部医務薬務課. へき地医療対策について, 1961.
- 6) 大島支庁. 昭和30年度版 奄美大島の概況, 発行年不詳
- 7) 宇都弘美・下敷領須美子. 奄美群島の産育をめぐる慣習の伝承と変容に関する研究—和泊町での調査より—. 南九州地域化学研究所所報, 2006, 22, 53—58.
- 8) 徳之島保健所. 20年の歩み, 1979.
- 9) 恩賜財団母子愛育会. 日本産育資料集成. 第一法規, 1975.
- 10) 田畑千秋. 奄美の暮らしと儀礼. 第一書房, 1992.
- 11) 下敷領須美子・宇都弘美他. 奄美群島における子育て支援の実態調査—保健師・母親への聞き取り調査を基に—. 母性衛生, 2006, 47 (1), 171—179.

(平成18年11月16日 受理)